

なつたような気がした。船長は、この先は浅瀬があるの
で少し沖を走ってみると言う。波は以外と静かになっ
た。皆一安心し、船長の顔にも笑いが洩れるようになっ
た頃、大岬燈台が見えてきた。引かれた船の者も万歳を
して船長の苦勞に応えている。

皆、誰に言うともなく「有り難う、有り難う。」と言っ
ている。「助かったんだよ。」と、子供の頭を撫でている
母親がいる。皆腹をすかしているのに気付き、にぎり飯
を分けあって食べている。

午後三時過ぎに稚内に着いた。狭いところに閉じ込め
られていたので、皆足がしびれている様子ですぐには岡
に上がれない。金の支払いその他の用を済ましている
と、弥満方面の定期船の船長に会った。船長から聞いた
話によれば、ある引き揚げ船が留萌沖で撃沈されたこ
と、方々で密航船が遭難にあったことなど聞かされ、私
達の幸運さと遭難者のあわれさとして皆涙が止まらなかつ
た。

それぞれの行き先を話し合い、健康でまた再会するこ
とを誓い合い大恵丸の船長に有り難う、とは言葉では言

い表すことが出来ないほど感謝の気持ちを込めて見送
り、これからの苦勞を胸に秘め個々の行き先に向かっ
た。

樺太から砂川へ

北海道 日浦 トミ

私は、昭和七年真岡より十キロ離れた広地郡、天茂泊
の日浦家に嫁ぎました。その後男の子三人に恵まれ平和
に暮らしておりました。しかし昭和二十年に私達一家の
生活も戦争のため一変しました。八月十五日終戦のラジ
オを多くの人とともに聞き全員が共に悲しんだ。終戦か
らの樺太が本当の戦場になりました。

八月二十日は朝三時から私の村も艦砲射撃で私は小学
校四年生、一年生、一歳の乳呑み児をつれ、主人は八十
二歳になる父を背負いたくさんの人と共に逃げました。

浜辺を歩いたり、近くの山の中へはいったり、大勢の人
と逃げ廻っているうちに主人と父がいなのにびっくり

しました。今来た道を夢中で主人をさかしましたが見つかることが出来ません。

私はその場にすわりこんでしまった。気がついて見ると子供達も朝から食事をしていないので、歩けなくなりました。そのとき山の方に学校が見えたので大勢の人と共に学校へはいり、いくばくかの食べ物をもって来たのを三人で食べほっとしたものの、一歳の子供のことをすっかり忘れていました。乳を吞ませている間にも主人と父のことが心配で頭から離れません。

しかし休む間もなく敵の戦闘機がバクダンをいたる所に落としているのです。疲れ切っている学校の中の二百人くらいの人が、又四方八方へとチリチリになって逃げました。本斗までは二十キロくらいだが本斗もあぶないからと、暗くなつてから山越えして大泊まで行こうと私達と一緒に逃げているグループの意見が多かった。そこで私は夜通し歩いてどのくらいかかるかと聞くと、明日のひるごろになるだろうとの返事でした。私はとても行く元気がありませんでした。そこで私は少人数で本斗へ行くことにしました。途中戦闘機の機銃掃射、二男が父

さんの所に行くと言って座り込み動かなくなり私もほとほと疲れ切りました。四、五人で歩いていたほかの人も、先に行つてしまいました。とうとう私達親子四人の逃避行となった。そして広地からリュックにつめて来た食糧もなくなりました。私もこんな不安になったことは今考えてもぞつとします。背中の乳呑児も泣く元気もなくぐったりしています。

不安と絶望で子供三人を道連れに死んだ方が良いと思いましたが、そんなとき後から一人のおばさんが来て、私は本斗に行くから一緒に行きましょうと言ってくれました。私はパッと目の前が明るくなり生きる望みがわきました。父の所へ行くと言って泣く二男をだましながらやつとの思いで本斗につきました。何時頃か分かりませんが本斗には人は一人も見あたりませんでした。やつとの思いで港を見つければとしました。

港へついでおどろいたことは、見送りの男達が大量泣いて別れをおしんでおりました。貨物船が四隻いて女、子供がいっぱい乗っておりました。私達四人もやつと乗船出来ました。乗船する前に、知人の男性に会いました

のでいつか主人に逢ったとき、私と子供三人が北海道に行ったことを伝えてくれるよう頼みました。船に乗ってから出航するまでの時間がたった一日の出来事なのにもすごい長い時間感じました。この日、見ず知らずのやさしい人々にささえられて、これから先北海道へ渡ってからの生活のこと、子供のこと、主人と父のこと、不安な気持ちがあうすらいでいくのを感じずにはいられませんでした。船は夜になってから出航しました。次の日の昼稚内に到着し、義姉のいる砂川へと向いました。其の後主人と義父は昭和二十二年春引揚げて来ました。やっと一家がそろいました。最後に戦争は二度と起こさないで下さい。

私の引揚体験記

北海道 齊 当 瑞 穂

私は昭和十一年、希望を胸にいただき樺太の地に夢を託した両親とともに、我々家族七人が渡樺致しました。(当

時私は七歳)でした。

落ち着いた先は北緯五十度線に程誓い西海岸の恵須取町という所へ入植、そこは大変、種々の面で、環境もよく戦時中とはいえわりと平穩の日が続きました。

それから後、二十年八月九日と記憶しておりますが、突如としてソ連が参戦私共の街にも進駐、空と海の両面から空襲或は艦砲射撃と忽ちにして、戦争に巻き込まれてしまいました。街も見える見るうちに焼け崩れ戦争の怖ろしさをそのとき身をもって味わったわけです。折りかえし折りかえし飛来する空襲爆撃には身もすくみ近くの麦畑へ逃げかくれるのがやっとでした。そして数日後の八月十五日、忘れもしない空は抜けるように晴れ渡った暑い日でした。日本は無条件降伏により終戦を迎えたときは、私は十七歳になっておりました。

それからが大変でした。どうしたら良いのか頭は混乱家財其の他の物についても愛着こそあれ、すべてに見切りをつけとにかくここから逃れる以外すべなしと、家族一同裸一かんで、我が家を後にしたのです。

出来得れば一日も早く皆の待つ集結場所までと、およ